



理事会だより (5・9)

- 一、令和六年度小田原秋季俳句大会(10月6日)の実施要項を決定①兼題「案山子」「柿」②締切8月2日(金)③投句先…須田聡子④選者特選賞…佃名誉会長、大石顧問、村場会長、青梅、おほゐ、鹿火屋。詳細は本号8頁。市長賞、市議会議長賞、教育長賞を事業部から市へ申請する。なお寿齢者表彰の継続是非につき意見交換し決定保留(継続検討)。
- 二、合同句集第13集の募集要項及び原稿執筆要綱案につき山田編集委員長より提案があり決定。
- 三、桜まつり俳句大会、懇親会(総会後実施)の会計報告。
- 四、新任理事(事業部の中田笑子・小林環・高橋千代子さん)が理事会に出席し挨拶。
- 五、句集作成、句の展示等へ誘導する不審電話があるので要注意。(理事会出席者の複数が受電)。

「俳句おだわら」10句抄(681号より)

鳥海壮六 抄出

城の梅光の芯となりにけり
 湾岸へ向かふゴンドラ風光る
 全集の前に立たせる小芥子雛
 青き踏む風になりたい里日和
 梅日和博物館の埴輪の目
 一鉢に和む且暮よさくら草
 前山の芽立ち促す鳥語なり
 初任地の様変りして陽炎へり
 百色の口紅ならぶ春の雨
 枇杷の花隣も前も独り者

寶子山京子 抄出

目のなれてまた見つけたる露の臺
 近径はぬかるみばかり一の午
 春の雨獸の走るトタン屋根
 倒壊の家を出でます加賀雛
 急ぎ割れば黄身二つあり春の朝
 眠気誘う未完の一句春炬燵
 挨拶をすませ子猫の機嫌とる
 畑中にソーラーパネル蝶生る
 日脚伸ぶ一人で祝う誕生日
 ほーら芽が出てきた出てきたじゃがいもブギ

近藤 久江
 池田 忠山
 寶子山京子
 田中 幸子
 杉本 久子
 西賀 久實
 芹澤 常子
 村場 十五
 畠 梅乃
 山田 照子
 吉田 康雄
 植松テル子
 石田加津子
 田中 恵一
 柳川 紀枝
 加藤れい子
 青木 孝子
 鳥海 壮六
 田代 孝子
 大石 雄介

俳句おだわら（5・19ノ切り、到着順）

山吹の咲く坂道の道標 板谷 雅泉

川音やひんやり暮るる桐の花 植松テル子

朧夜の視力聴力記憶力 神山つとむ

◆春野（4・21） きよ志報

雉子の声一直線に野を奔る 秋山 昇

小気味よき川の流れや桜桃忌 伊藤はる子

日永し体内時計遅れがち 内田知江子

目刺焼く煙の中の余生かな 尾崎 一夫

よるべなく流れてゆきぬ花筏 瀬戸 悠

雨あがる野山の春は再起動 二見 和江

成人記念の前撮り春は闌けにけり 長谷川きよ志

◆みなみ（4・20） かほる報

花の雨甘味処の和紙明かり 斉藤 静

しゃぼん玉空に遊んで「あつ消えた」 小瀬村信子

手の甲に味見する母独活小鉢 柳川 紀枝

多国籍の箱根にぎわう木の芽風 加藤 富江

思ひ出せぬ漢字いろいろ花は葉に 加藤れい子

第一走者陽炎を越えてゆく 加藤 健治

思うほど動かぬ手足座禅草 市川めぐみ

しゃぼん玉触れれば夢のこわれそう 豊田 幸枝

混沌のこの世を遊ぶ花吹雪 加藤かほる

◆小田原鹿火屋（4・26） 久江報

踊子草春の大地の大舞台 足立 和子

出来ること指折り数へ朝桜 川本 育子

夏めくや茶舗の幟の鮮やかに 高橋 小糸

春落葉杖の先にて躊躇せり 山崎 悦子

哲学の道に名残りの花遊ぶ 近藤 久江

◆香雨・梅ごち（4・28） 忠山報

子を膝にふらここ漕ぎし日の遠く 肥後ちさこ

聞きのがす受診番号目借時 関戸わよこ

琴の音の洩るる格子戸竹の秋 青山 典子

ざわざわと日差しを散らす竹の秋 門松 鳳文

門までも英国仕立て薔薇の園 吉田 百代

のどけしや親子のかはす糸電話 吉田 康雄

青饅や遺影の祖母は割烹着 陌間みどり

春夕べしづかに「トロイメライ」弾く 小澤 純子

かげろふや遠のきさうに電車くる 池田 忠山

◆こよろぎ（5・9） つとむ報

朧夜のぼんぼり灯る屋形船 高杉掘三朗

◆青梅(5・8)

幸子報

鮎釣りの棹の誘うはのんびりと

大塚 行人

滝音は朝の山寺清めをり

湯本とし子

ふる里や田水に映る一両車

加藤まり子

野の風の青き匂ひや夏近し

久保寺トミ子

春惜しむ匂友とはんなり京料理

田中 幸子

◆山北(4・25)

由里子報

予報士の棒の先なる春一番

和田恵美子

本命の合格通知春の山

尾崎 幸子

乱筆の講義ノートや芝青し

星 一義

美容師の身の上話鉄線花

石田加津子

花の昼無声映画とコーヒーと

竹下由里子

◆おほる(5・8)

きよ子報

満開の笑顔這ひくる初節句

横塚 昌平

緑摘む世間知らずの自己主張

石井千代子

行雲流水鞦韆ゆらす山頭火

小野 菊土

いつのまにいつもの道が柿若葉

香川 花子

万緑や知足のしあわせ囁み締める

加藤 春江

誇らしげな銀輪の背こどもの日

高橋みどり

青年の弾む靴音柿若葉

中根登美子

卯の花や水音変えて酒匂堰

中村 昌男

柿若葉陽に透けそうな優しさよ

中津川晴江

柿若葉甘い渋いは先のこと

廣田 悦子

芍薬やキャンデイごとき蕾つけ

安池 利枝

かたばみや小さく凜と立ち上がり

原 仁子

あつあつの筍飯を供へけり

松良 榮美

公園のはるか向こうに霞む富士

吉井源太郎

柿若葉ゆつくり目指せ熟れる日を

二上 光子

豌豆の鞘を無心に雨の午後

石井きよ子

◆鷹(5・4)

十五報

縁側に目刺食ふ父酒二合

青木 孝子

春の雨音読の声二階より

池田 令子

清明や波あそばせて海石どち

西賀 久實

板葺きの屋根を花びら走りけり

佐宗 欣二

リラ冷えや紅茶に浸すビスケット

須田 晴美

遠回りし畑の枝垂桜かな

中田 笑子

花は葉に撮影会のパイプ椅子

百川 秀子

こきざみにゆるるネモフィラ春夕

山崎美知子

夏初め目力強くアイカラ

柏木 良花

水切りの石は戻らず卒業す

庄司 下載

開け放つ窓に朝風藤の花

瀬戸 りん

繰り言は母の元気やアマリリス

高橋久美子

薫風やサイドミラーに朝の富士

中山智津子

ほうたんのいま開かんとして重し
疲れ眼を庭の若葉に癒されて

荒井ちゑ子
岩本ひさみ

芽柳や雨の水輪のほつほつと

齊藤 桂

百年の小学校の楠若葉

杉本 久子

川べりの雀だまりや草青む

芹澤 常子

真鶴や生簀の鯔に見られをり

木村 幸枝

墳丘に荒れたる道や青蜥蜴

深澤 一華

若葉雨蔵改造の喫茶店

新井たか志

梢揺れ目白追ひたる双眼鏡

大木 敬子

黒羽目の家並や燕躰りたる

大島美恵子

◆零(5・16)

史郎報

楠若葉少彦名を祀る宮

田下 昌人

日本に平和憲法五月富士

青木たけを

海鳴や駅舎抜けゆく燕の子

中根 和子

香水が祝宴場をジャックする

伊藤 道郎

騷騒と聞こゆる峰の若葉かな

加藤 幾代

白・黄色庭の山吹みだれ咲き

川合 昌子

血圧に一喜一憂さくらんぼう

高橋千代子

富士山に寄り添うように芝桜

佐藤 正子

山里の母校がロケ地燕来る

守屋 まち

寄れば飛ぶ子雀はもう反抗期

中村 裕子

伽羅路や懐かしき人みな遠く

米山 翠

頂上小屋薬師とアルプス夏姿

野川木一路

曇りても明るき空や牡丹園

來田 新子

囀りや天国は補聴器いらぬ

岡本 史郎

一人寝のツェルトの屋根の蛍かな

青山 典仁

◆沈丁(5・16)

寶子山報

豆飯や同じ話を諾へり

小林 環

ふるさとの話ふつつつ苺食む

若村 京子

レース衿付け一張羅となりにけり

下平 美子

透かし見るハウスの中の苺かな

柳澤ミサ子

蛍火を追ひたる稚児の指かな

澁谷 明子

通学路少し外れて苺パフェ

田中 恵一

百年の樟に風音蝸牛

鳥海 壮六

もぎたての苺ほほばりゲーテ読む

河本 純子

薫風や鋏にこつんと石つころ

古屋 徳男

娘の爪わたしに似てる苺煮る

瀧本 敦子

老いて觀し青春映画新樹光

村場 十五

人生の放課後長しいちご食む

勝木 澄子

◆実のり(5・15)

たか志報

蛇苺早くおいでと父の声

菅野 英余

野苺の味覚えたり一年生

高井 幸子

夏蝶の黙してついで来し万歩

片野 節子

りんご館屋台釘付け浴衣の女子

峯尾ユキエ

自撮り人単衣とくつと海青し

清水美代子

ベビーカー笑みが指さす苺畑

松下 俊之

のほほん夏空をゆくはぐれ雲

武居裕美子

いちご漬す卓の明るさ子の明るさ

寶子山京子

◆草むら(5・19)

重満報

へばりつくこの生活よ雨蛙

石井 秀稀

新樹山永久機関あるらしき

佐々木重満

◆無所属

短夜や亡夫の寢息の空耳に

小林永以子

ドクターへり上昇蝌蚪の水騒ぐ

島 梅乃

穏やかに暮れゆくひと日目刺焼く

一ノ瀬茂代

初燕見たと開口一番に

出澤 洋子

五月蠅いと書いただけで叱られて

大石 雄介

さくらとは違う誰かが鳴いていた

大石 和子

放つたらかしの庭にひよろりと花菖蒲岡田

典代

新玉葱を輪切り四ツ切りみじん切り

山田 照子

踏まれたる麦は穂を出し天を向く

田畑ヒロ子

燕来るうれしい空の交差点

須田 聡子

乳母車風に背を向け多佳子の忌

岩楯恵津子

ゆつくりと田水張る先夜もすがら

山本 すみ

五月雨や飲み干してしまいたい嘘

穂坂志げる

梅雨晴間若き庭師等スマホ擦り

神野美代子

射程圈内射程圏外虎が雨

瀬戸 正洋

白夜なり人も初めはドリーの子

杉崎 せつ

白薔薇や少年の夢無傷なり

小澤 園子

画廊の明暗抜けて夏つばめ

大佐田うづき

陽炎の奥にかげろう過去未来

杉山あけみ

日も脳も霞の一日終りけり

蓑宮 わか

母の日や母の遺品の山のごと

北村 文江

*

理事会日程

6/13 7/11 8/8

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

北村文江

ほーら芽が出てきた出てきたじがやいもブギ

大石 雄介

リズム感がとつても良いですね。作者は毎日「土」とにらめっこしているのでしょう。定型にとらわれず、下五を「ブギ」でしっかり止めています。細かいことは何も言っていない、それが読者には心地良い。今年は三月の寒さで霜の被害にあった「じがやいも」もあったと聞いています。「じがやいも君」がなれば。収穫された「句」もお願いします。

田畑ヒロ子

能登大隆起海女が海を探してる 岡本 史郎

令和六年元旦に起きた能登震災は五ヶ月目になり、ライフライン、生活、環境はまだままならない。能登は海の仕事が多いのであるが、作者はそれを海女さんに絞った。海女さんには男の海女さんもいて、海にもぐれない苦悩を何カ所かのアルバイトで凌いでいると、ある日テレビ放映があった。作者が能登の海を思う時、「海女が海を探してる」は切ない。

野川木一路

黄水仙小さな童話生まれそう

加藤かほる

たった十七文字の言葉の中に、大きな物語を想像できる素敵な作品ですね。私はこんな作品が好きです。童話はアニメの故郷だと私は考えています。すべての植物の故郷は地中です。そこには多くの花の世界も存在している筈です。こんな世界があったらいいなー、と思う物語を作るのもありだと思います。待っています。

守屋まち

春浅き川面にゆらぐ雲の影

山崎 悦子

近所の川沿いの道を歩くのが、私の好きな散歩コースだ。川は季節によって様々な景を見せてくれる。掲句は、立春を過ぎたばかりの川面。わずかに風があるのだろうか。まだ動きの鈍い雲が影を落とし、川の流れにゆらいでいる。あたかも、「暖かくなったら、余所の景色も見に出かけたい」と言っているようだ。

待春を川面に捉えた佳句。

豊田 幸枝

段畑にまだ母の影花みかん
働いたその名は信女藤の花
木洩れ陽や画布の中から滝の音
夕映えや昂ぶり秘めて滝落下
人体に関節いくつ濃紫陽花

門松 鳳文

溪流の水嵩あがり梅雨に入る
梅雨晴や庭先に並ぶ干し傘
物干しに真白き産着梅雨晴間
空梅雨や庭の手入れを懇ろに
溪流の魚跳ね上り梅雨明くる

片野 節子

荒ぶ世のいづれの音も夏立ちぬ
招かざる客うつすらと黄砂くる
電線の無き街ひかる初つばめ
河鹿笛聴く単線の行きどまり
かつこうや何処かになにか忘れもの

青山 典仁

目の蒼きひとと踊るや鷗外忌
夏座布団はい紅茶よと妻の声
寝ころべば草の香あをし夏の星
ビルに凭る半壊のビル大西日
紅茶飲む小指の立てりサングラス

蓑宮 わか

山滴る登山電車の止まる駅
杉檜花粉散らしの風が吹く
朧夜や無口の亡夫生き字引き
野に居りて玩具はいらぬ草の笛
奥の院までの石段著我の花

二上 光子

春めくや気持ちゆるゆるほどける
春の陽や吾が影ぼうし柔らかし
満天星や夜明けの庭でまたたきぬ
菜の花や土手を優しく包みおり
嫁御前の髪に挿したし花きぶし

中村 裕子

菜の花やポツポツ灯りゆく在所
清流に映ろう穂高聖五月
銀杏若葉古巢みえなくなりそうな
新樹揺る大海原は息深く
月見草風にやさしく答えてる

中津川晴江

風光る不安と期待の真ん中で
渋味増す母の手の皺新茶汲む
人の世の甘酸に似て夏蜜柑
菖蒲湯の刀振り上げ天下取り
大井庄代田に二つ雲写す

令和6年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「案山子」「柿」(いずれも傍題可)各一句一組

未発表作品に限ります。

締切 令和六年八月二日(金) 必着

整理費 一組につき千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒258-0053小田原市堀之内七九

須田聡子 ☎〇四六五―三二六―〇九四

*作品は原稿どおり印刷しますので、楷書で、大文字小文字をはっきりとお書きください。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 小田原市長賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和六年十月六日(日)

会場 おだわら市民交流センター (UMECO)

受付 十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費 五百円(呈飲料)

席題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位まで 参加賞

(主催) 小田原俳句協会 (後援) 各地俳句協会

*会場は飲食可能ですがなるべく各自食事を済ませて
ご参集ください。参加人数が多数見込まれますので、

感染症防止対策にご留意ください。

合同句集13集の発行について

今年度は定期総会で決定の通り「小田原俳句協会合同句集第13集」発行の年度に当ります。

前回第12集は令和元年十二月に発行しており五年振りとなります。詳細の要項と原稿執筆要綱は会員全員に配布しますので皆様のご協力をお願いします。骨子は次の通りです。

記

○参加費無料

○全会員参加でひとり20句(第12集以後の各人の全作品から自由に選んでください、協会報記載の有無は問いません。)

○体裁 A5版 1ページ2名

○原稿締切 令和6年9月12日

○配布予定 令和6年度中

○1冊目は無料 2冊目から1冊千円で頒布

編集委員長 山田照子